

企業も人も変化を怠ると、アツという間に時代に取り残されてしまいます。「わが社は何のために仕事をするのか」という使命を自覚し、マンネリを打破し、トップ自らが高い目標に向かって新鮮な風を起こし続けていかなければなりません。

それには企業の基軸を明確にしていく必要があります。容易に変えられない、ぶれない軸を求め、それに根ざした理念や基本方針が必要です。一方、変革方針を示すものが戦略です。経営ビジョンをどのように実現するかを具体的に表わしたものです。理念と戦略の双方が合っており、初めて経営として具現化されるのです。

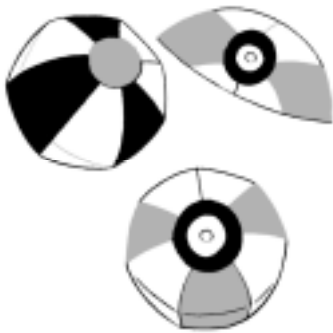
「私はこういう考えで会社を経営しています」「経済、社会の変化に適応していきます」など、企業の存在理由をはっきりさせ、基本的な考え方や具体的な行動様式を決めることによって、自社の結束を強くしていくのです。

Y氏は今、「素性のわかる豆腐作り」をテーマに取り組んでいます。大豆を作る人、豆腐を作る人、配達をする人、買ってくれる人、食べてくれる人など、みんなが顔見知りになり、「この人のために大豆を作る、豆腐を作る」というコンセプトです。

この人が作った大豆だから、豆腐だから安心だという、人と人とのつながりの中に結ばれる信頼関係と安心感が大切だということです。安全で体に良い食品は、良好で健全な人間関係から生まれるとY氏は考えるのです。

経営理念は、その企業が順風のときも逆風のときも、企業を正しい方向へ導いてく

## 理念と戦略を明確にし 未来へ敢然と向かおう



え・牧えみこ

れる羅針盤の役割を果たします。しかし、ただ理念を知っていればいいということではありません。会社が存続していくための原点として、日々の仕事のよりどころにするものなのです。

それには社員・協力関係者に対して、事あるごとに繰り返し説明し、深く理解し、共感・納得してもらうことが大切です。企業に巣くう問題は、少しずつジワジワと時間をかけて根を張っていきます。その根を経営者の強い意志と旺盛な実行力で乗り越えていくのです。

私たちは人生という河を、ボートを漕ぐように生きています。ボートは背中の方に向かって進んでいきます。通り過ぎてきた過去はハッキリと見えますが、自分が今まさに進み行く未来は、よく見ることはできません。現在という波の中をオールで漕ぎながら、見えない未来に向かって手探りで後ろ向きに進んでいるのです。

しかし、見えないからといって心配することはありません。河の流れにゆったりと身をまかせながら、これまでの経験と勘を活かすことで、多くのリスクを背負いながらも目標に到達することができるのです。

変に怖がってじっとしていても、誰も、何も、相手にはしてくれません。敢然と立ち上がり仕事に向かうとき、家族も、友人も、知人も、得意先も、そして社員も、みんなが助けてくれるのです。

断じて行なえば環境(まわり)も変わり、時勢(とき)も動いていくものです。理念と戦略の相乗によって、進むべき道を切り拓いていきましょう。